

## 上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（若手研究）

研究代表者 所属・職名 附属小・教諭

氏 名 風間 寛之

研究期間 令和 2 年度

研究プロジェクトの名称	生活科を中核としながら、基礎力・思考力・実践力の連関を生み出すカリキュラム構成の工夫
研究プロジェクトの概要	<p>本研究では、生活科を中核としながら、子どもの生活体験に基づく教科活動を展開し、子どもが生きてはたらく知識や技能を自らつくり出すカリキュラム構成を工夫することを通して、国立教育政策研究所が提唱する 21 世紀型学力を構成する基礎力・思考力・実践力を育成することを目的とする。</p> <p>これを達成するために、生活科（創造活動）を中核に据えながら、国語科、算数科、図画工作科、道徳教育との有機的な結びつきが生まれるよう意図的・計画的に単元等を構成・配列する。これにより、低学年の子どもにおける基礎力・思考力・実践力が連関しながら育成されていく過程を見取ることに重点を置く。子どもの体験を軸としながら、体験から生まれるさらなる願い（次は〇〇をしたい、もっと□□したい）に着眼すると共に、教科活動によって子どもがつくり出す知識や技能を想定してカリキュラムを構成することで、子どもは生活体験そのものが学びであることを実感する。これを積み重ねることは、教科の学びによってつくられた知識や技能を基に思考をひろげ、実践したことが自らの生活をより豊かなものにつくり変えることにつながるというプロセスそのものである。つまり、基礎力・思考力・実践力を連関させながら発揮し続け、自らの学校生活をよりよくつくり出していくのである。</p> <p>これを達成するために生活科を中核にしながら、教科活動の構成を見つめ直す。カリキュラム構成の視点として、①子どもが生活科を中心に学校生活をつくる環境の工夫、②子どもの興味関心と各教科の知識や技能を結び付けること、③多様な視点から生活を見つめ直すことの 3 つを設定し、活動を構想する。</p>
<b>研究 成 果 の 概 要</b>  ※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。	①子どもが生活科を中心に学校生活をつくる環境の工夫について 当学級で取り組む生活科（創造活動）「もこもこえん」で飼育する 4 頭のヒツジが生活する場（柵）を教室横の前庭に建設した。ヒツジの様子や鳴き声から常にヒツジを傍らに感じて生活する子どもは、雨に濡れるヒツジの姿から、前庭に小屋を建設した。そして、登校すると飼育小屋からヒツジを教室前に連れてきて、休み時間を柵の中で過ごし、下校時にまた飼育小屋にヒツジを戻すという、ヒツジと自分とのかかわりを中心とした生活を創り出した。 ②子どもの興味関心と各教科の知識や技能を結び付けることについて 外国語活動では「MrSheep's Bread」（鈴木出版、あきやまだし）を子どもに 1 冊ずつ配布し、継続的に読み聞かせや音読をした。子どもは、ALT と一緒に英語を声に出して読んだり、友達と一緒に読んだりして英語に親しんだ。 国語では、「もこもこえん」で描きためてきたスケッチブックの絵から想像をひろげ物語を創作する「おはなしもこもこ」の活動を展開した。オノマトペや接続語と言った表現技法を効果的に用いて、楽しみながら物語を創ることができた。このように、ヒツジとのかかわりから、教科活動への関心をひろげ、各教科の特性を生かした活動を構想・展開することができた。 ③多様な視点から生活を見つめ直すことについて 10 月、柵から出ようとするヒツジの姿を共有し、ヒツジにとっての柵の意味を問う実践道徳を構想・展開した。ヒツジの安全を守るための柵、自分にとっての楽しみをひろげるための柵といった考えが挙げられる中、「柵があった方が自由だ」と発言する子どもがいた。これまでのかかわりから、柵があればその中で自由に生きたいところに行くことができることに価値を見出したのである。柵とヒツジのつながりから、ヒツジや自分にとっての「自由」について見つけ、道徳的な価値観をつくり変えている姿であると考えた。さらに、このように考えた子どもは翌日、柵の拡張工事を始めるなど、実践道徳で思考したことと行為とを連続させている様子が見られた。 これらの姿から、生活科を中心とした学校生活の中で、教科教育・道徳教育が深まり、これによってさらに自身の学校生活を見つめ、つくり変えるという連関関係が見られた。
研究成果の発表状況	「子どもの『問い』が立ちあがる」（2021・学事出版）上越教育大学附属小学校
学校現場や授業への研究成果の還元について	・上越教育大学講義にて創造活動「もこもこえん」を公開 ・上越市通級指導教室担当職員研修にて実践国語科「おはなしもこもこ」を公開